



TITLE:

京大広報 No. 608

AUTHOR(S):

京都大学広報委員会

CITATION:

京都大学広報委員会. 京大広報 No. 608. 京大広報 2006, 608: 2065-2084

ISSUE DATE:

2006-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196486>

RIGHT:



京大広報

No. 608

2006. 1



第7回京都大学国際シンポジウムの様子



第6回京都大学国際シンポジウムのポスター発表

第6回・第7回京都大学国際シンポジウムを開催
—関連記事 本文2068ページ—

目次

新しい年を迎えて 総長 尾池和夫……………2066

〈大学の動き〉

新年名刺交換会……………2067

第6回・第7回京都大学国際シンポジウムを開催

……………2068

タマサート大学・チュラロンコン大学との学術交流

……………2069

教育研究推進本部・経営企画本部消防訓練行われる

……………2070

〈部局の動き〉

日本の熱帯林研究者らがマレーシア・サラワク州

森林コーポレーションと研究に関する覚書を

締結……………2071

医学部附属病院に「黄斑疾患治療センター」を設置

……………2071

〈日誌〉

〈寸言〉

ノーベル賞と京都大学 尾古俊博……………2073

〈随想〉

幻の宇治分校 名誉教授 興膳 宏……………2074

〈洛書〉

おひなちんでみなひをもとむ

河合隆裕……………2075

〈栄誉〉

常脇恒一郎名誉教授、本席 佑名誉教授が

日本学士院会員に選ばれる……………2076

三嶋理晃医学研究科教授らのグループがベルツ賞

を受賞……………2077

〈訃報〉

〈話題〉

京都大学未来フォーラム(第19回)を開催……………2079

能楽鑑賞会を開催……………2079

第105回化学研究所研究発表会を開催

……………2080

第2回8大学工学系博士学生フォーラムを開催

……………2081

〈公開講座〉

平成17年度大学院人間・環境学研究科公開講座

……………2081

〈お知らせ〉

総合博物館『マリア十五玄義図』展……………2082

遺伝カウンセラー・コーディネータユニット

合同イントロダクトリーセミナー……………2083

経済研究所シンポジウム……………2083

平成17年度防災研究所研究発表講演会……………2084

〈編集後記〉

……………2084

京都大学広報委員会

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

新しい年を迎えて

総長 尾池 和夫

みなさん、明けましておめでとうございます。

今年は組織改革、事務改革を進めることから始まると思い、そのことをこの挨拶で表そうと言葉を考えましたが、結局、組織改革、事務改革は、教職員の一人ひとりが明日の京都大学を、自分たちの手で作り上げていくのだという心がなければ、また、京都大学を作るための改革に主体的に取り組んでいくのでなければ、改革はできるわけがないと思いました。言葉の問題ではなく、心から皆さんのご協力をお願いすることしかないという結論になりました。今年4月には必ず、新しい組織の中で仕事が行われる姿を、今年の大きな目標として、その意志を教職員一人ひとりが、もう一度明確にしていきたいと思っています。

世界にはさまざまな国で多様な暦が用いられており、日本と同じ太陽暦の1月1日で新年を祝う国ばかりではありません。例えば、京都大学の外国人留学生の中で最も数の多い中国人学生が500人ほど、京都大学で学んでいます。太陰太陽暦では、今年は立春より早い太陽暦の1月29日が太陰太陽暦の1月朔日にあたり、この日が春節です。

またシンガポールやマレーシアのようにさまざまな暦を持っていて、年に4回も正月を迎える国もあります。国際化を目標としている京都大学では、このような多様な民族の生活習慣も今後は考えていかなければならないと私は思っております。

明治の初め、1872（明治5）年11月9日、突然太政官達（たっし）第337号が出され、太陰太陽暦から太陽暦への変更が決まりました。明治5年12月3日を新暦明治6年1月1日にするものでしたが、すでに刷り上っていた明治6年のカレンダーはすべて刷り直しとなりました。旧暦のままだと明治6年は閏月を入れる年で、政府は月給を13回払うことになっていたのが、突然の改暦の理由だったと思われます。いつの世でも、政府が急激な改革を実現しようとする背景には、かならずこのような予算支出の差し迫った問題があるのです。

新年を迎えて、私は昨年（しねん）の1年を、あらためて振り返ってみました。多くの困難（くわんなん）がありましたが、そ

れらを皆さんのご努力（ごにくりつ）とご協力（ごきやうりき）で乗り切ることができたと思います。昨年（しねん）には機構（きこう）が発足（はつそく）して、図書館、情報環境、国際交流、イノベーション、環境安全保健（けいようあんぜんほけん）などが、共通教育（きょうつうきょういく）とともに機構（きこう）のもとで動くようになりました。これも大きな改革（かいか）であったと思いますが、教職員（きょうしきん）の皆さんの理解（りかい）と協力（きやうりき）で順調（じゆんてう）に仕事（しごと）が進（すす）んでいます。

機構（きこう）が発足（はつそく）した昨年（しねん）4月1日には、大学病院（だいがくびやういん）で看護師（かんし）が自らデザイン（でざいん）した看護服（かんしふく）を着用（しやくよう）するという場面（ばん）がありました。これも大きな出来事（きらい）であったと思います。この服（ふく）は、京都大学病院（きょうとだいがくびやういん）の基本理念（きほんりねん）の一つである、「患者（けいしや）中心（しん）の開（ひら）かれた病院（びやういん）として、安全（あんぜん）で質（しつ）の高い医療（いりやう）を提供（ていきやう）する」という主旨（しゆし）に基づ（よ）いて、特に機能性（きぬんせい）を重視（じゆうし）してデザイン（でざいん）したものです。

安全・安心（あんしん）の社会（しやかい）という言葉（ことば）をよく聞（き）くようになりましたが、京都大学（きょうとだいがく）を取り巻（とりま）く社会（しやかい）では、さまざまな事故（しごと）や事件（じけん）がありました。いずれもそれ（そ）らが、行き過ぎ（いきよぎ）た経済性（けいぎせい）や成果（けいこ）の追求（しゆきう）の結果（けいこ）であるのではと言（い）われました。アスベスト（あすべすと）の問題（もんだい）もありました。台風（たいふう）や洪水（こうすい）による災害（さいがい）、震災（しんざい）、テロ（てろ）なども後（ご）を絶（た）ちません。情報ネットワーク（けいほうねっとわーく）の発達（はつたつ）に伴（よ）って、個人情報保護法（こじんけいほうほごはう）への対応（たいおう）、情報ネットワーク（けいほうねっとわーく）に関（かん）わる事件（じけん）や事故（しごと）もあり、新しい型（かたち）の犯罪（はんざい）も見（み）られました。子ども（こども）に対して（たいして）、人（ひと）を信（しん）じては（い）けないという教育（きょういく）が行（い）われるほど不幸（ふこう）なこと（こと）はないと思（おも）います。京都大学（きょうとだいがく）の役割（やくえき）の中（なか）にも、教育（きょういく）と研究（けんきゅう）のテーマ（てま）として、心（こ）の問題（もんだい）、倫理（りんり）の問題（もんだい）が深く存在（そんざい）すると思（おも）います。

学生（がくせい）のことを少（せう）しくわ（わ）しくご報告（ごほうこく）しておこうと思（おも）います。昨年（しねん）は、2月17日（に）に、授業料（じやうぎやうりょう）の改定（かいてい）を発表（はつぷつ）しなければならなかつた（なかつた）という、たいへん（たいへん）つらいこと（こと）がありました。

6月28日（に）は、杉本明洋（すぎもとあきひろ）さんが世界陸上選手権（せかいりくじやうせんしゅけん）出場の決定（けつてい）を、総長室（そうぢやうしつ）へ報告（ほうこく）に來（き）ました。8月（はちがつ）にヘルシンキ（ヘルシンキ）で行（い）われる世界陸上選手権（せかいりくじやうせんしゅけん）の男子競歩20キロ（なんしやうけいほ20きろ）の日本代表（にっぽんたいはう）に選（えら）ばれ、壮行会（さうぎやうかい）を時計台記念館（とけいだいきねんくわん）前で開（ひら）



催しました。

3回の国際シンポジウムが昨年ありました。生命科学をテーマにシンガポールで、農業をテーマに北京で、地域研究をテーマにバンコクで開催しました。東アジアで現地の多くの専門家を巻き込んで、京都大学の大学院生たちが活発に研究を発表する場とすることができたのが何よりでした。私もフィールドワークで活躍するたくましい学生たちの姿に感動しました。

学生の提案で私も一緒に考えた15種類のカレーを提供するという生協の行事の宣伝効果は抜群でした。このニュースはたいへん大きく取り上げられ、Yahooにリンクされたり、大学受験「旺文社パスナビ」トップの大学注目情報にも掲載されました。多くの受験生や市民が京都大学のサイトを見てくれることになり、広報のあり方に一つのヒントを与えられました。

キャンパスミーティングも第9回になり、各部署の学生たちの声を直接聞くことができました。また、熊野寮の年末のコンパにも呼んでもらって、おいしい鍋料理を楽しみながら騒ぎましたが、中には国民投票法案を学習して反対しなければというような議論を熱心に持ちかけてくる学生もいました。

体育館のアスベスト使用が判明しました。空気中の測定値は大きくなかったのですが、クラブ活動や授業に大きな影響が出るとはいえ、いずれ処置

しなければならないこと、花折断層が動けば震度7になる可能性のある地域でもあり、放置できない問題ですので、体育館の使用を禁止して改修することを決断しました。その際、近隣の小学校などから、大きな協力が得られましたが、それが京都大学の学生たちの日頃のボランティア活動などを高く評価したこともあって得られたものと聞き、たいへんうれしく思いました。

このようなさまざまな学生の活躍と元気な姿を見ることができたのが、私にとってたいへんうれしいことでした。

国立大学をめぐる社会情勢はたいへん厳しく、第1期中期目標期間に実現すべき多くの課題がありますが、京都大学の教職員はそれに向かってたいへんな努力をしており、優秀な学生たちが研究に学習に日夜励んでいます。今年も京都大学のミッションをしっかりと心にとめて、学問の伝統を守り、必要な改革を進め、社会貢献の役割を果たしていく国立大学であるよう、私も精一杯の仕事をしていく所存であります。

今年も、まずはみなさん方がご自分の体をいたわり、健康な一年を過ごすことに心がけていただきたいと思います。その上で、力一杯仕事をする教職員であり、先輩方にはそれを見守り、かつ励ましていただくようお願いしつつ、私の新年の挨拶といたします。

大学の動き

新年名刺交換会

1月4日（水）の10時から時計台記念館国際交流ホールにおいて、尾池和夫総長をはじめ沢田敏男元総長、西島安則元総長、井村裕夫元総長、各名誉教授、丸山正樹、東山紘久、松本 紘、木谷雅人、中森喜人、北 徹の各理事、松重和美、林 哲介、横山俊夫、荒木光彦の各副学長、各部署長および教職員約250名が出席して新年名刺交換会が行われた。尾池総長の挨拶の後、沢田元総長の乾杯の発声で新年を祝い、盛会のうちに午前11時に終了した。



第6回・第7回京都大学国際シンポジウムを開催

京都大学では、世界に開かれた大学として先端的な学術研究を積極的に展開していくため、平成12年度より毎年、本学が誇る独創的な学術研究を対象とする国際シンポジウムを海外で開催しています。平成17年度は、北京とバンコクにおいて2件のシンポジウムを開催しましたので、ここに報告します。

(参考：京都大学ホームページ http://www.kyoto-u.ac.jp/kenkyu/02_koku/koku02/sympo.html)

第6回京都大学国際シンポジウム “Plant Sciences in Japan and China — from Genomics to Breeding (日本と中国における植物科学研究—ゲノミクスから育種へ)”

平成17年10月8日(土)、9日(日)の2日間、中国・北京の中国農業科学院作物科学研究所において開催した。本学からは教職員35名が参加し、農学研究科、理学研究科、生命科学研究科の教員19名および大学院生9名が、口頭講演11題、ポスター17題により、本学における基礎から応用までの幅広い植物科学研究の成果について研究発表を行った。中国側からは、中国農業科学院、中国科学院、北京大学、中国農業大学、南京農業大学、東北師範大学、山東大学の研究者らが口頭講演17題、ポスター15題の研究発表を行った。

シンポジウム会場は常に多数の中国側研究者・大学院生(合計219名)で満員となり、日中参加者の間で熱心な討論が行われた。8日夜には尾池和夫総長主催の歓迎会を催し、約200名が参加し盛会となった。9日夜には中国側主催による歓迎会が開かれ、翟虎渠(Zhai Huqu)中国農業科学院長をはじめとする中国側の主だった参加者と本学参加者との間で大いに話が弾んだ。また10日には、本学参加者が3つのグループに分かれ、中国農業科学院作物科学研究所、中国科学院遺伝および發育生物學研究所、北京大学生命科学部を訪問し、サテライト・ミー



ティングを行った。

本学参加者には今回初めて中国を訪問する研究者・大学院生も多く、中国における植物科学研究の認識を新たにすることができた。一方、中国側参加者からは、本学の幅広い植物科学研究の質の高さに賛嘆の声が聞かれた。このように第6回京都大学国際シンポジウムは成功裏に終了したが、この成功は、本学関係者の努力とともに、中国農業科学院の翟虎渠院長、作物学研究所の万建民(Wan Jianmin)所長および張学勇(Zhang Xueyong)教授、国際合作局の甚大な支援の賜物であった。ここに深く感謝の意を表したい。

第7回京都大学国際シンポジウム “Coexistence with Nature in a ‘Glocalizing’ World — Field Science Perspectives (地球・地域・人間の共生—野外科学の地平から)”

平成17年11月23日(水)、24日(木)の2日間、タイ・バンコクのナイラート・パーク・ホテルにおいて、本学が誇る学術領域のひとつであるフィールド・サイエンスを柱に開催した。本学からは、21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」に参加するアジア・アフリカ地域研究

研究科が幹事部局となり、同COEプログラムに参加する東南アジア研究所に加えて、防災研究所、農学研究科、情報学研究科、医学研究科が協力部局として参加した。開催にあたっては、タイの高等教育研究を管轄する国家機関であるNRCT (National Research Council of Thailand)の協賛を得、またチュラロンコ

ン大学、タマサート大学、カセサート大学の協力を得た。

シンポジウムでは、本学からの12名の講演者を含む21の講演と、本学の大学院生・日本学術振興会特別研究員14名を含む16件のポスター発表が行われた。タイ国内からの多数の参加者に加え、インドネシア、ラオス、スリランカからの参加もあり、合計222名の参加により、充実した研究発表と活発な討論を行うことができた。本学からは尾池和夫総長、横山俊夫国際交流推進機構長が参加し、またタイ側からはNRCTのAhnond Bunyaratvej事務局長、タマサート大学のSurapon Nitikraipot学長、カセサート大学のViroch Impithuksa学長らが出席し、祝辞を受けた。

本学東南アジア研究所は、40数年前からバンコクに連絡事務所を設置し、東南アジア大陸部における本学の研究活動を支援するとともに、東南アジア各国の研究者と連携を重ねてきた。今回のシンポジウムは、同連絡事務所の全面的支援を得、また同研究所を中心として本学が築いてきた長年の人的ネットワークの蓄積を最大限に活かす形で実施された。

今回のシンポジウムにおいて、本学における高いレベルの地域研究の実力をアピールするとともに、現在まさに発展しつつある地域研究に携わる若手研究者との交流、また大学院生間の新たな交流が生まれ、



今後の研究交流がますます発展することを確信した。

シンポジウムの一環として、25日（金）午前、海岸浸食を研究しているチュラロンコン大学のThanawat Jarupongsakul 助教授の引率で、バンコク西南部海岸の侵食状況を視察するエクスカージョンが行われた。また、同日午後にはカセサート大学で「東南アジア大陸部の森林科学」に関するフォーラムが開催された。さらに、上記21世紀COEプログラムの企画として、ミャンマーとラオスのスタディー・ツアーが実施され、アジア・アフリカ地域研究研究科の学生が参加したことも併せて報告する。関係各位にお礼を申し上げたい。

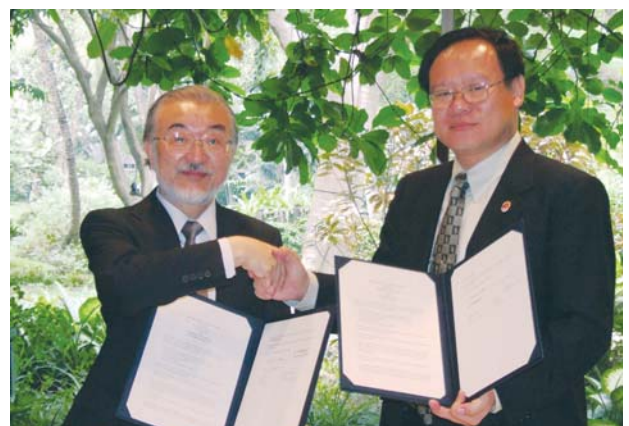
（国際交流委員会）

タマサート大学・チュラロンコン大学との学術交流

本学とタマサート大学・チュラロンコン大学は、大学間学術交流協定の締結について協議を重ねてきたが、このたび本学と同大学の教育・研究の交流と協力を推進するための「学術交流に関する一般的覚書」をそれぞれ交換した。

タマサート大学との「覚書」は、本学尾池和夫総長と同大学Surapon Nitikraipot学長の署名により、平成17（2005）年11月23日（水）に交換された。

同大学は、1934年に設立されたタイでは2番目に歴史のある大学。行政学部、工学部、経済学部、歯学部等の14学部、大学院を有する総合大学。教員は1,000人。学生は20,000人。ホームページは<http://www.tu.ac.th/default.tu.old/default.eng.html>



尾池総長と Surapon Nitikraipot 学長

チュラロンコン大学との「覚書」は、本学尾池和夫総長と同大学Suchada Kiranandana学長の署名により、平成17（2005）年11月23日（水）に交換された。

同大学は、1917年に設立されたタイで最も歴史のある大学。文学部、理学部、商学部、医学部、工学部、法学部等の19学部、大学院を有する総合大学。教員は2,500人。学部学生は14,000人。院生は5,200人。ホームページはhttp://www.chula.ac.th/cuweb_en/



尾池総長（右）とSuchada Kiranandana学長

教育研究推進本部・経営企画本部消防訓練行われる

平成17年12月16日（金）に消防計画に基づく本部職員の消防訓練が午後3時から約1時間にわたり左京消防署の指導のもとに行われた。

参加者は、3グループに分かれ、屋内消火栓訓練、起震車地震体験、119番通報訓練を実際に体験し、万一の場合に役立つような基本訓練を行った。

なお、各部局等においても、次のとおり実施された。

月 日	実施部局名等
6月6日	原子炉実験所
6月7日	北部構内
10月17日	原子炉実験所
11月9日	桂キャンパス
11月17日	医療技術短期大学
12月21日	宇治地区



起震車による地震体験



屋内消火栓による放水訓練

部局の動き

日本の熱帯林研究者らがマレーシア・サラワク州森林コーポレーションと研究に関する覚書を締結

ボルネオ島のマレーシア・サラワク州では、京都大学を含む日本の大学と研究所の研究者らが、15年以上にわたって熱帯林研究を展開してきた。とくにランビル国立公園は、本学生態学研究センターの海外研究拠点の1つとなっており、フィールド・ラボや林冠クレーン、ウォークウェイなどの林冠観測システムが備わる、東南アジアでもっとも重要な研究拠点の1つとして国際的にも広く認められている。ここでは現在、生態学研究センターと連携し研究を進める総合地球環境学研究所（地球研）のプロジェクト（代表：中静 透地球研教授）や科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業でのプロジェクト（代表：鈴木雅一東京大学大学院教授）などをはじめ、気象から生態学や社会学まで、さまざまな研究が進められている。

平成17年11月29日（火）～30日（水）に、ボルネオのマレーシア・サラワク州クチン市で「森林生態、水門気象学と森林生態系リハビリテーション」をテーマに国際シンポジウムが開かれた。このシンポジウムにあわせ、日本の研究者らで組織する日本サラワク熱帯林研究コンソーシアムとサラワク森林



ランビル国立公園の熱帯雨林とその林冠に研究者が直接アクセスするための林冠クレーン。85メートルの高さがあり、世界に9基設置されているものの中でも最大級である。

コーポレーションの間で、研究協力に関する覚書が締結された。この覚書は1993（平成5）年に締結されていた覚書を更新し、さらに協力研究を広げていくために締結されたものである。2日間にわたるシンポジウムでは、サラワクで研究を展開する研究者やサラワク森林コーポレーションの研究員が共同研究の成果を発表し、情報交換を行った。このシンポジウムと覚書の締結については、地元の新聞でも大きく取り上げられた。

（生態学研究センター）

医学部附属病院に「黄斑疾患治療センター」を設置

医学部附属病院において、近年日本でも問題になっている原因が究明されていない眼の病気、黄斑疾患を患っている患者さんのための治療センターが平成17年12月1日（木）に設置された。

黄斑疾患センターの設立された目的は、黄斑疾患に対する最善の治療、黄斑疾患専門医の育成、さらには、黄斑疾患に関する集学的研究学を行う、とい

うものある。

吉村 長久 黄斑疾患治療センター長によると、「診察室では20年前にはこの病気の患者さんを診ることはなかった。しかし、10年前からボツボツ見かけるようになり、今では、1日に10人の新たな患者さんを診る時代となった。」ということであり、同センターが今後、重要な役割を果たすことが期待される。

黄斑疾患とは…

黄斑疾患の中でも、50歳から増え始めるのが加齢黄斑変性症である。眼底の中心部に「黄斑部」があり、視力の維持にはこの「黄斑部」が正常に機能することが重要である。老化とともに網膜に老廃物がたまり、この「黄斑部」が変性すると、視野の中心部がぼけたり、歪んでみえたり、中心がみえなくなる等の症状が出る。これに加えて、「脈絡膜新生血管」が発症すると、更に重篤な視力障害を起こす。

特に60歳以上の男性に多く、症状が進むと本が読めないばかりではなく失明することもある。原因は不明だが喫煙や高血圧との関係が指摘されている。

(医学部附属病院)



眼底に加齢黄斑変性がみられる症例

日誌 2005.11.1 ~ 11.30

- | | |
|---------------------|-----------------------------------|
| 11月1日 役員会 | 18日 財務委員会（第11回） |
| 〳 部局長会議 | 〳 大学入試センター試験実施委員会 |
| 2日 財務委員会（第10回） | 21日 役員会 |
| 4日 留学フェア2005 | 22日 総長、タイを訪問（25日まで） |
| 〳 環境・安全・衛生委員会 | 〳 企画委員会（第12回） |
| 9日 職員組合との団体交渉 | 23日 11月祭（26日まで） |
| 10日 企画委員会（第11回） | 〳 第7回京都大学国際シンポジウム（タイ・バンコク）（24日まで） |
| 11日 学生部委員会 | 25日 入学者選抜方法研究委員会 |
| 〳 中国、朱小蔓 中央教育科学研究所長 | 26日 京都大学大阪講演会 |
| 他2名、総長他と懇談 | 28日 役員会 |
| 14日 役員会 | 29日 財務委員会（第12回） |
| 15日 全学共通教育委員会 | 〳 役員会 |
| 16日 国際交流委員会 | 〳 教育研究評議会 |
| 〳 IIOフェア（京都会場） | |

寸言

ノーベル賞と京都大学

尾古 俊博

「思ったよりも狭いなあ」。ノーベル賞の授賞式会場となるストックホルムのコンサートホールに、足を踏み入れた第一印象だ。日本の豪華なイベント会場を見慣れた目には、簡素に映った。



2002年12月。日本中が大騒ぎした島津製作所、田中耕一さんのノーベル化学賞受賞を取材するため、スウェーデンにいた。授賞式は報道陣もブラックタイの服装指定があり、精一杯の盛装（といっても普通の黒のダブルだが）で会場に入った。用意された席は最上階に近く、一般招待客に挟まれ、のぞき込むようにしながら式典を見守った。式の直後、各国の記者と一緒に壇上に上がり受賞者を囲んで話を聞いたが、日本ではまず考えられない光景だった。

確かな記憶はないのだが、幼いころ、「大きくなったらノーベル賞をとる」と言っていたらしい。1949年に湯川秀樹博士が物理学賞を受賞して、さほどたっていないところで、国民的な熱気が影響したのだろう。高校のころ、京都大学を志望したのもそのせいかもしれないが、大学に入るところには「野望」はどこかに消えてしまった。怠惰な学生生活を送った挙げ句、何とか大学を卒業し、新聞社に入ったが、そこでノーベル賞と、か細いながら不思議な縁ができてしまった。

最初は1981年。京都大学工学部教授だった福井謙一さんが化学賞を受賞した。まだ駆け出しで、受賞本体の取材はできなかったが、住んでいたアパートが福井さんの家に近かった関係で、発表翌日の祝賀客などの取材を指示された。近所で買ったパンをかじりながら、早朝から日暮れまで福井さんの家の前で待ったが、特に大きな動きはない。ノーベル財団からの正式通知が電報で来たことを確認したのが、かろうじての収穫だった。

福井さんの受賞は各新聞社ともノーマークで、記事作成には苦勞した。その教訓から、受賞しそうな

研究者をリストアップし、研究業績などをあらかじめ予定稿にしておくことが、各社の大学担当の仕事の一つになる。

87年、京大理学部出身で米マサチューセッツ工科大学教授の利根川進さんが医学生理学賞を受賞する。当時京都府北部に赴任していて取材はできなかったが、京大の記者クラブ担当だった時の予定稿が紙面で使われた。

90年代に入って再び京大記者クラブを担当。毎年10月のノーベル賞発表シーズンには、特別態勢で京都関係者、特に京大関係者の受賞に備えた。なかでもマークした一人が神戸大学長だった故西塚泰美さん。受賞に備えて大学側が用意する会見会場には毎年、記者とカメラマンが詰めた。私自身も神戸に何度か行ったほか、出張した西塚さんを追っかけて福岡までいった記憶がある。

結局、90年代の日本人受賞は94年に大江健三郎さんが文学賞を受けただけ。毎年の準備もなんとなく気乗りしなくなっていた。そこへ2000年から三年連続計四人の受賞という大当たり。このうち、京大関係は01年に化学賞を受けた野依良治さんで、下馬評が高かったため準備は一応できていた。だがその翌年、田中さんの受賞はまったくの不意打ちで、発表当日はわが社だけでも50人を超す記者、カメラマンが取材に駆け回った。

◇

長くノーベル賞を取材していると、研究にはやはり独創性が大切なことを実感する。京大関係のノーベル賞受賞が多い理由として、独創性のある研究を行いやすい自由な校風が挙げられてきたが、それもうなずける。しかし、在学中の体験からいえば、それは一方で「落ちこぼれる自由」でもあった。個人的には貴重な体験だったが、国立大学法人になり、説明責任が求められる現在では、そういった自由は許されないことかもしれない。

京大では学生指導面の改革が急ピッチで進んでいる。粒ぞろいの人材を送り出すのは大学の責務だが、その一方で、規格外の発想ができる研究者をどう育てていくのか、京大の新たな挑戦に期待したい。

（おこ としひろ 京都新聞社社会報道部部長代理、昭和51年理学部卒）

随想

幻の宇治分校

名誉教授 興膳 宏

私は1957（昭和32）年に京都大学に入学した。ところが、せっかく京都に来たというのに、最初の一年間は宇治分校で教育を受けるのだと聞いて、ひどくがっかりした。当時の宇治分校周辺はまったくの田舎で、いわば文化的僻地だったからだ。



宇治分校のキャンパスは、旧陸軍火薬庫跡に設けられていて、貧相な正門からだらだらと坂道を下ってゆくと、あちこちで水が湧き出ている湿地帯に、バラックの校舎が点在している。暑くなるとマムシが出ることもあるので、保健診療所にはマムシの血清が備えてあるという噂だった。構内には火薬庫時代の建物をそのまま利用した教室もあり、冬など、足下からしんと冷えてきて、講義を聴きながら、早く終わればよいのにとばかり思っていた。

足の便は、今も同じ京阪電車の宇治線だが、当時はいかにもローカル線そのもので、車両も古く、夏の夜など、開けた窓から蛾やカナブンがしきりに飛びこんできた。宇治川の上流にまだ天ヶ瀬ダムはなく、大雨が降ると、観月橋あたりがよく冠水して、そのつど電車は不通になった。

京阪黄檗駅から分校正門までは、徒歩7、8分の距離である。右手には延々と続くコンクリートの長い塀、左手は沼地だらけで、梅雨の時期など、蛙の大合唱に送られて通学した。当時から今に至るまで残っているものといえば、隣の自衛隊と、教科書を買っていたニシムラ書店ぐらいのものだ。駅の周辺にも、およそ学生の街といった雰囲気はまるでなかった。

そんな環境だから、学生たちは授業が終わると、さっさと帰ってしまう。先生たちはスクールバスでやってきて、講義をすませると、これまた帰りのバスに遅れないように、ハイさようならだ。図書館に

行けば、蔵書といえるほどの書物もなく、勉強は京都へ行ってからにしろ、といわれているような感じだった。この宇治分校は、やがて4年後の1961年（昭和36年）に廃止されるから、大学でも施設改修などほとんど考えていなかったのだろう。

こんなふうに書いてくると、宇治分校の一年間は、ただ退屈でしかなかったことになる。確かにそういう面もあるのだが、一方で私は宇治の生活を楽しんでもいた。分校から府道を隔てた東側には、黄檗山万福寺がある。私は万福寺の一塔頭の下宿していた。当時は、万福寺を訪れる観光客はまだ少なく、末寺の経済も楽ではなかったようで、学生に下宿を提供している寺はいくつもあった。私の下宿した寺はまかない付きで、荒れてはいたが住み心地もよく、私を含めて5人の京大生が寄宿していた。

万福寺の前は、一面の広い茶畑だった。総門を入った放生池の傍には、江戸中期の俳人菊舎尼による「山門を出れば日本ぞ茶摘みうた」の句碑が立っている。純中国風の境内と茶畑とのコントラストが、いかにもぴったりの景観だった。句碑は今でもあるが、いつの間にか茶畑はすっかり姿を消してしまった。

5人の下宿生は、文字通り同じ釜の飯を食っていたせいか、すっかり仲良くなり、休日には近くの空き地でキャッチボールをしたり、夜な夜な手持ちの安酒を持ちよって、コンパをしたりした。黄檗駅のすぐ傍に、小さなうどん屋があって、夜遅くまで、おばさんがひとりで店を開いていた。夜が更けて、腹が空くと、誰がいい出すともなく誘いあい、寺の木戸をそっとくぐり抜けて、うどんを食いに行ったりもした。よく食べたのは、大盛りの「びっくりうどん」である。

私はいま宇治に住んでいて、散歩がてらに宇治キャンパスの前を通ることがある。そんなとき、つい懐旧の情に引かれて、中に入ってみたくなるが、しょせん昔を今になすよしもがな、どうしてもあと一歩が踏みこめない。

（こうぜん ひろし 元文学研究科教授、平成12年退官、専門は中国文学）

洛書

おひなちぢんでみなひをもとむ

河合 隆裕

齢60を数えれば来し方を振り返る機会も多いけれど、少なくとも公的な面に限れば、真に幸運であったの一語に尽きる。文字通り “the best and the brightest” の集う数理解析研究所（まあ中には私のように‘鶴群の一鶏’も混じってはおりますが）で周りの方々に引張りあげてもらい、又、押し上げてもらい続けてきているのだから。尤もこの思いは京都大学で60才を迎えられた方なら皆さん共有される所ではあろう。最近“大学の評価”が話題になることが多いけれど、結局の所“良い大学”とは優秀な友人・同僚と切磋琢磨できる場を提供している所、と云うことであり、その意味では、“認証評価”がどうであろうと京都大学が“良い”場所であることは衆目の一致して認める所だと信じている。（因みに言えば、最近いろいろ報告書を作成することも多いけれど、こう云う評価法だときっと陸軍幼年学校等“最も効率の良い教育を行っている所”と云うことになるのだらうな、と云う気のすることが時にある。）従って、自分をとりわけ“幸運”と感ずるのは、田舎に育ちながら中学・高校時代に良い先生と巡り合えたせいだとも考える。中学時代に数学の本田先生、高校時代に物理の一本先生にお会いできたのは確かに幸せだったな、と思う。お二人共飄々としたお人柄で（‘田舎の’と云う修飾句は付くにもせよ、一応中高共受験校だったはずなのだが）受験のこと等さらに念頭に無し、と云った雰囲気（今流に言えばシラバス等全く無視）；本田先生には3年間お世話になったのだけれど、中3の3学期の授業（かなりの部分が試験であった）等ひどいもので、生徒との力比べ、と云った感じの（初等幾何の）難問ばかり。どんな問題だったか、具体的に覚えてはいないけれど、まず間違いなく今の自分なら解けないレベルだったと思う。生徒の方もそれを楽し



んでいたのだから、あれこそ真の“ゆとり教育”であったと今にして思う。このお二人の御経歴に共通項があることを知ったのは大学に入ってからであつたろうか。お二人共学生時代航空機設計を目指されたが、敗戦でその途が閉ざされた、とのことであった。つまり、お二人は理数系の最高の俊英であられた訳で、さすれば、中高の授業等余裕綽々だったのも宜なるかな、と云った所である。結局良い授業は教師の実力の反映、と云うことの一例であろう。こうして数学と物理の間を振れながら、大学で“ ε - δ 論法”と云う高校では全く教えられなかった話が引金となって（この程度の物に惹かれたと云うのは我ながら如何にもミーハー的だと思うけれど少なくとも“スカッと爽やか”だったことは間違いない）数学を専攻して現在に至っており、最初に触れた通り、その道筋は神に感謝するしか無い幸せなものであったけれど、年来少々気にかかっているのは、高校時代心に決めたこと、即ち「いつか物理の教科書を書いて“一木の呪文”を広めよう」、が実行できそうにないことである。拙文の表題がその呪文で、内容はフレミング右手法則・左手法則に関わる。「これ頭がゴチャゴチャになる話やろ。ワシ（だったと思う）の昔考えた覚え方を教えてやるわ。」と言って一本先生が教えて下さったのが、おひなちぢんで・・・だったのである：

お⇔親指、ひ⇔人差指、な⇔中指、ち⇔力、ぢ⇔磁場、で⇔電流

と対応させると

みな⇔右手は中指、即ち電流、ひを⇔左手は親指、即ち力、を求める、と読む。

どうも大学の広報に高校理科のこと等書いて気持ちの引掛りを解そう、等と云うのは図々しい話ではありますが、まあここはオルテガの囁みに倣って、現代を支える諸理念の体系と言え自然科学、その重みが、現代文化の担い手たる京都大学でもっと増加するように、との願いを込めての文章、と開き直って筆を擱くこととしましょうか。

（かわい たかひろ 数理解析研究所教授、専門は代数解析学）

栄誉

常脇恒一郎名誉教授、本庶 佑名誉教授が日本学士院会員に選ばれる

このたび、常脇恒一郎名誉教授、本庶 佑名誉教授が日本学士院会員に選ばれました。

以下に両名誉教授の略歴、業績等を紹介します。

常脇恒一郎名誉教授は、昭和28年3月京都大学農学部農林生物学科を卒業、同30年3月京都大学農学研究科修士課程（農林生物学専攻）を修了後、博士課程に進学された。昭和30年8月米国カンサス州立大学大学院博士課程に編入学、同33年同課程（遺伝学専攻）を修了し、ph. D. の学位を修得された。昭和34年9月までカナダ国マニトバ大学においてポストドクトラルフェローとして研究に従事して帰国、同年10月に国立遺伝学研究所（生理遺伝部）の研究員に採用となり、同40年9月室長に昇任された。同年11月京都大学農学部助教授に配置換えとなり、次いで、同41年4月教授に昇任、農林生物学科実験遺伝学講座を担任された。平成6年停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。この間、同名誉教授は京都大学農学部実験遺伝学講座担任の教授として学部および大学院学生の教育・研究指導ならびに後進研究者の育成に尽力されるとともに、評議員および大学院審議会審議員を務め大学の管理



運営に寄与された。退官後は福井県立大学生物資源学部教授に就任、平成10年4月より平成17年3月まで同大学学長を務められた。

同名誉教授は、研究面では、有用植物の遺伝学、特に、コムギの遺伝、進化、育種に関する分野において多くの重要な業績を挙げられた。その主なものは、「比較遺伝子分析」、「細胞質ゲノムの比較研究」、「異種細胞質の育種的利用の基礎研究」、「細胞質ゲノムの分子遺伝学的研究」、「核ゲノムの分子遺伝学的研究」である。これらの研究成果に対し、日本農学会より昭和53年度日本農学賞（読売農学賞）（小麦の起原と系統分化に関する比較遺伝学的研究）が、日本遺伝学会より平成4年度日本遺伝学会木原賞（コムギおよびエギロプス属における細胞質ゲノムの遺伝的多様性）を受けられた。また、平成8年に米国科学アカデミー外国人会員に選ばれている。

これらの業績に対し、平成7年紫綬褒章、平成9年日本学士院賞、平成14年には文化功労賞者として顕彰されている。

（大学院農学研究科）

本庶 佑名誉教授は、昭和41年京都大学医学部を卒業、同46年同大学大学院医学研究科博士課程を修了、米国カーネギー研究所およびNIHにおける博士研究員を経て、同49年東京大学医学部栄養学教室助手に採用され、同54年大阪大学医学部遺伝学教室教授となられた。昭和59年に京都大学医学部医化学教室第一講座（のちの大学院医学研究科分子生物学）の教授に就任され、平成17年3月に定年により退職され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。



引き続き京都大学医学研究科寄附講座免疫ゲノム医学の特任教授として研究を継続中である。また平成16年4月から、日本学術振興会学術システム研究センター所長を併任され日本の科学研究費の配分システムの改革に取り組んでおられる。

無数の病原体を認識排除するためBリンパ球は、多様な抗体分子を産生する。その分子メカニズムは長らく免疫学の大きな謎であった。1970年代後半から分子生物学的手法を用いてその解明が進み、抗体の多様性はBリンパ球がその遺伝子をDNAレベルで改変していく事により生み出される事が明らかにされた。その中で本庶特任教授は、常に先駆的業績

をあげてこられた。特に抗原刺激を受けた成熟Bリンパ球で起こる2つの現象、クラススイッチ（産生する抗体のクラスがM型からG, E 又は A型に変化する）と体細胞突然変異（免疫応答の進展に伴い抗体可変領域遺伝子に変異が導入され、より高い親和性を持つ抗体を産生し得るようになる）に関する研究では、当初から世界をリードしてこられた。1978年に抗体重鎖定常部領域遺伝子がクラススイッチと連動して欠失する事を発見し、これに基づきクラススイッチ組換えはDNAの環状欠失モデルで説明しようと提唱、さらにそれを実験的に証明された。80年代半ばには、クラススイッチの誘導制御因子としてIL-4とIL-5を同定された。さらに特筆すべきは、Activation-induced cytidine deaminase (AID)を発見、AIDがクラススイッチ組換えと体細胞突然変異を制御する遺伝子である事を示された。これ

まで全く違う現象であると考えられていたクラススイッチ組換えと体細胞突然変異を、1つの分子AIDが司るという発見は、免疫学の長年の謎を解明したものであり国際的評価が高い。

これら一連の研究に対して、同特任教授には、朝日賞、木原賞、武田医学賞、ベーリング北里賞、上原賞、ほか多数の賞が授与された。さらに平成8年に恩賜賞、学士院賞が同特任教授に授与され、平成12年には文化功労者に選ばれた。これまでに米国免疫学会名誉会員、米国科学アカデミー外国人会員、ドイツ自然科学者アカデミー・レオポルディナ会員に選出されている。今回の学士院会員への選出は、これまでの同特任教授の一連の業績が評価されたものであり大変喜ばしい。

(大学院医学研究科)

三嶋理晃医学研究科教授らのグループがベルツ賞を受賞

日本の医学研究の分野において優れた論文に対して贈られる、第42回「ベルツ賞」の1等賞に三嶋理晃医学研究科教授（呼吸器内科学）らのグループが選ばれ、11月16日（水）に東京のドイツ大使館公邸において贈呈式が行なわれました。

ベルツ賞は、日独両国間の歴史的な医学関係を回顧すると共に、両国の医学面での親善関係を更に深めて行く目的で、1964年にドイツの製薬会社ベーリンガーインゲルハイム社によって設立された賞です。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

三嶋理晃教授は、昭和52年に京都大学医学部を卒業し、同62年同大学胸部疾患研究所理学呼吸器科講師、平成4年同助教授、同年カナダ・マギール大学ミーキンス・クリスティ研究所客員研究員、同10年4月京都大学医学部附属病院助教授、同13年4月より同大学大学院医学研究科呼吸器内科学教授に就任、医学部附属病院教授を併任されている。平成17年4月より同病院内科長として、法人化後の大学病院の整備にも尽力されている。学外では、日本呼



吸器学会常務理事、日本呼吸器学会将来計画委員長、日本呼吸管理学会理事、ヨーロッパ呼吸器学会日本代表、国際COPD連盟理事などを務められ、国内外で呼吸器病学の発展と向上に大きく寄与されている。

三嶋教授らのグループの今回の受賞テーマは「COPDの病態解析と治療法開発・治療評価への挑戦 - CT画像解析・チオレドキシン創薬・アウトカムスタディを通して-」で、フラクタル（自己相似）の理論などを用いた画像診断法を開発、病変の定量評価と病変が広がる機構を解明した。

また、共同研究者の京都大学ウイルス研究所の淀井淳司教授らが開発した抗酸化物質チオレドキシン

を用いた治療法を研究。さらに、治療効果と予後の評価法や、病変の主要な場所の違いが病因や治療法にかかわることなどを解明、個々の患者に合わせたオーダーメイド治療に道を開いた。

三嶋教授が臨床研究のテーマとして継続してきたものに、慢性閉塞性肺疾患（COPD）、肺循環障害およびそれらを原因とした呼吸不全の病態の解明・治療法の確立などがある。従来の肺機能検査が満足にできない高齢者が多いCOPDに対して、ランダム波オシレーション法や、呼吸位相法など、安静呼吸下で非努力依存性に施行できる検査法を開発した。

COPDには肺気腫と、慢性気管支炎があるが、胸部CTを用いて、フラクタル解析・テクスチャー解析・気道解析などの手法を用いて、これらの定量的評価・識別手段を開発し、COPDの早期発見・治療法の選択などに新たな道を拓いた。現在、呼吸器内科の診療科長として、肺癌、間質性肺疾患、COPD、喘息、呼吸器感染症、呼吸不全など、多彩な呼吸器疾患を網羅した優秀なスタッフを揃え、実地医療、研究の両面から京都大学に貢献している。

（大学院医学研究科）

訃報

このたび、つきた しょういちろう月田承一郎医学研究科教授が逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

以下に同教授の略歴、業績等を紹介します。

月田 承一郎 医学研究科教授



月田承一郎先生は、平成17年12月11日逝去された。享年52。

先生は、昭和53年東京大学医学部を卒業、同大学大学院医学研究科博士課程を同57年に修了し、医学博士号を授与された。

昭和57年東京大学医学部講師、同61年東京都臨床医学総合研究所室長、平成2年岡崎国立共同研究機構生理学研究所教授を歴任した後、同5年京都大学医学部教授に就任され、平成7年大学院医学研究科教授に配置換えとなり現在に至っていた。この間、平成8年より平成13年まで、科学技術振興事業団創造科学推進事業「月田細胞軸プロジェクト」を主宰し、平成14年より岡崎国立共同研究機構生理学研究所客員教授を併任していた。本学医学部および同大学院医学研究科では、分子生体統御学講座分子細胞情報学教室（旧医化学第二）の管理運営にあたり、学生の教育と研究者の指導、育成にあたられた。

先生の専門は電子顕微鏡レベルの形態学に基づいた分子細胞生物学、すなわち細胞が持つ特徴的な構

造に着目し、その構成蛋白質を同定して機能解析を進めることによって、細胞の機能を分子レベルで理解しようというもので、とりわけ細胞骨格、細胞接着の分野で顕著な業績を挙げてこられた。その中でも、近年のクローデインの発見に代表される「細胞間接着装置タイトジャンクションの分子構築」に関する一連の研究は、長らく謎であった上皮細胞間隙バリアーの分子基盤の概念を確立したものとしてきわめて斬新で、細胞生物学分野における真の意味でのブレークスルーとして国際的にも高く評価されている。また、電子顕微鏡を用いた神経軸索輸送や筋収縮のメカニズムに関する研究、アクチン繊維と細胞膜を繋ぐERM蛋白質の同定と機能解析など、細胞生物学の多岐にわたって数多くの際だった業績を残された。

これらの学術上の貢献に対し、高松宮妃癌研究基金学術賞、井上学術賞、上原賞、日産科学賞、マイエンブルグ賞（ドイツ）が贈られ、平成16年には日本学士院賞が授与された。

（大学院医学研究科）

話題

京都大学未来フォーラム（第19回）を開催

平成17年11月28日（月）に時計台記念館・百周年記念ホールにおいて、恒例となった未来フォーラムが開催された。第19回目となる今回は、梅原 猛氏に「日本文化とは何か」というテーマでご講演いただいた。

講演では、ソクラテス、デカルトなどの合理主義とニーチェやハイデガーなどの非合理主義という相反する二つの哲学書を耽読した大学時代の勉強についてや、西田幾多郎氏に影響を受け、西洋だけでなく東洋、特に仏教の思想を学び、その上に独自の“自分で考える哲学”を目指されたという哲学への姿勢、ご自身の哲学観について語られた。

また、笑いの研究から生まれた異なるジャンルの学者との交流や、“向こうから語りかけてきて”始めた8世紀の研究における法隆寺秘仏への疑問、建立の謎についての仮説のひらめきなどについて語られた。学生の皆さんに対しては、「学問は知識を詰め込まなくてはできない。しかし発見は知識にとら



われていては駄目だ。相反することを一人の人間ができる。それが創造だ。」とする湯川秀樹氏の言葉を紹介され、学問が孤独なものであり、学者は頭がいいだけでは駄目で勇気がいるとする持論など、多くのメッセージを送られた。

梅原氏の学問に対する熱い姿勢と気さくな語り口調に490名の参加者はすっかり魅了され、盛況のうちに講演は終了した。

能楽鑑賞会を開催

平成17年12月7日（水）に京都観世会館において第49回能楽鑑賞会が、狂言と能の2部構成で開催された。

狂言の演目は、「魚説経」であり、シテを演じてくださった4世茂山千作先生は人間国宝であり日本芸術院会員でもある。

先生の演じられるシテは、漁師あがりのにわか出家のため経を知らないの、魚の名前を連ねて誤魔化そうとするのであるが、その仕草や節回しには人間への暖かさが感じられ、会場にはほのほのとした笑いがあった。

能の演目は、世阿弥の代表作といわれている「井筒」であり、シテを演じてくださった片山清司先生は、9世片山九郎右衛門先生（人間国宝）のご子息であり京都市芸術新人賞を受賞されている。ま



た、九郎右衛門先生は地謡として出演された。

この「井筒」は、一人の女性が清らかな慕情を回想するというシンプルな展開なので、かえって能の本質的なものが感じられ、大鼓の澄み切った音に導かれ幽玄の世界に一時を過ごすことができた。

学生部職員が午後4時30分頃に会場に着くと、6時30分の開演にもかかわらず既に20名程が並ばれていたのには驚かされた。参加者の中には、留学生や外国人研究員も数多く見受けられ、日本の伝統芸能への関心の高さもうかがわれた。終演後に外国人参加者の「WONDERFUL」という大きな声は、関係者を喜ばせていた。

今回、初めて実施したアンケートでは、回収130枚のうち、「よかった」107名、「また参加したい」103名と多くの人に好評だったことが数字でもうかがえる結果となった。

今後も学生部としては、課外教養の一環として能楽鑑賞会を続けたいと考えており、来年は節目の第50回目となりますので、まだ能楽鑑賞会に参加されたことのない方も、是非参加していただきたいと思ひます。そして、日本人が作り出した世界最古の舞台芸術に接してみてください。

（学生部）

第105回化学研究所研究発表会を開催

化学研究所は、平成17年12月2日(金)に宇治キャンパスの化学研究所共同研究棟において、第105回化学研究所研究発表会を開催した。



挨拶をする江崎所長

今年、化学研究所は創立79周年（1926年創立）を迎え、挨拶に立った江崎信芳所長は、「79年間守り続けてきた設立理念『化学に関する特殊事項の学理および応用の研究を究める』は、化学研究の本質を突いた素晴らしいもので、化学の先駆的、先端的研究を追求している限り、対象や内容について細々と指示せず、研究者の自由に任せるという考えを表明するものです。今さら改めて申すまでもなく、学問の自由は、知識や文化を育て、科学技術を創造する源です。重要な現象や原理は、先の見えないことを続けて行くなかで見いだされることが多く、研究者の自発性や自由を大切にしなければ、優れた研究は育まれません。これからもこの理念を堅持し、化学研究所をさらに発展させていきたいと考えています。」と述べ、化研の特長を活かした分野間の融合を今後益々進めてほしいとのメッセージを伝えた。

今回は一般講演5件と所長賞受賞講演1件に加え、初めての企画として、所長賞学生奨励賞を受賞した大学院生2名による講演も行われた。加えて、幅広い研究分野を誇る本研究が昨年度に採択した、異分野の若手研究者による共同研究、「化研らしい融合的・開拓的研究」の研究発表が4件行われた。



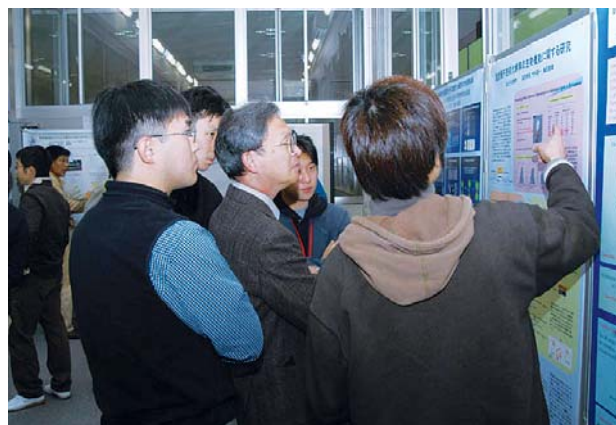
所長賞と同賞学生奨励賞を受賞した3名

今年、化学研究所は創立79周年（1926年創立）を迎え、挨拶に立った江崎信芳所長は、「79年間守り続けてきた設立理念『化学に関する特殊事項の学理および応用の研究を究める』は、化学研究の本質を突いた素晴らしいもので、化学の先駆的、先端的研究を追求してい

る限り、対象や内容について細々と指示せず、研究者の自由に任せるという考えを表明するものです。今さら改めて申すまでもなく、学問の自由は、知識や文化を育て、科学技術を創造する源です。重要な現象や原理は、先の見えないことを続けて行くなかで見いだされることが多く、研究者の自発性や自由を大切にしなければ、優れた研究は育まれません。これからもこの理念を堅持し、化学研究所をさらに発展させていきたいと考えています。」と述べ、化研の特長を活かした分野間の融合を今後益々進めてほしいとのメッセージを伝えた。

午前の部では、小野輝男教授による「スピ流による磁性化状態制御」、西田幸次助教授による「高分子電解質溶液における相互作用反転と構造形成」の講演が行われた。引き続き、優れた研究を行った若手研究者に対して授与される「所長賞」・

「所長賞(学生奨励賞)」の表彰式と受賞者講演が行われた。また、口頭発表の間には、ポスターセッション「研究室全体の活動・成果の紹介」と「研究室のトピックスの紹介」の2系統のポスターにより、合わせて67件の発表が行われた。



ポスターセッションの様子

休憩を挟み、午後の部では、柘植知彦助手による「植物の『かたち作り』と『環境応答』を繋ぐ制御因子の解明」、服部正泰助手による「化合物構造比較法に基づく酵素反応特有な原子変換パターンの解析」、則末和宏教務職員による「海洋のプルトニウム同位体の起源解析のための化学的アプローチ」の講演が行われた。

本研究発表会では、所内を含む約130名の参加者を得て、化学研究所の特長である“化学を中心とした広い自然科学分野”にわたる最先端の研究結果が発表され、それぞれに熱心な聴講と活発な討論が行われた。終了後は、研究発表会懇親会が宇治生協会館にて、教職員200名の参加を得て盛大に行われた。



研究発表会場の風景

(化学研究所)

第2回8大学工学系博士学生フォーラムを開催

平成17年12月12日（月）～13日（火）に福井謙一記念研究センターにおいて、「第2回 8大学工学系博士学生フォーラム」を開催した。

これは、平成16年度開始の8大学（北海道大学、東北大学、東京大学、東京工業大学、名古屋大学、大阪大学〔工及び基礎工〕、九州大学、京都大学）9工学系研究科が共同で取り組む博士後期課程教育のためのGP活動の一環として実施されたものであり、2回目となる今回は本学が当番校として企画・運営を行った。

本フォーラムは、8大学の博士後期課程の学生の参加に加え、教員および産業界からの協力者を得て、博士後期課程学生の大学・専攻を超えた交流を図り、企業や大学において研究・教育を推進していくために必要な意識を、大学教員および産業界からの助言を通じて深めることを目的として行った。

内容は、松重和美副学長による「大学の知を基盤としたイノベーション創出」、梶田 治氏（福田金属箔粉工業（株）取締役）によるご講演「伝統産業から21世紀へ」、高等教育研究開発推進センター教授陣による講座「博士課程学生のための教育実践講座－大学でどう教えるか－」、博士後期課程の学



生がそれぞれの研究内容を発表する「研究のフロント」、あらかじめ設定した課題に基づく討論を行った「課題別討論」、および「総括会議」からなるものであった。

参加学生からは、他大学や他分野の方と話をする機会があまりないため、このフォーラムによって大いに刺激を受けた、大学を超えたネットワーク作りのよい機会となったなど、大変有意義であったとの感想が寄せられた。

（大学院工学研究科）

公開講座

平成17年度大学院人間・環境学研究科 公開講座 女性と男性・男と女 ―研究の現場から―

1. 日 時：2月21日（火）・22日（水）13:00～18:00
2. 場 所：人間・環境学研究科棟地階大講義室
3. プログラム：2月21日（火）

ルネサンス美術にみる妻と夫
性と生
平安時代のお産の社会関係

大学院人間・環境学研究科教授	岡田 温司
大学院人間・環境学研究科教授	津田 謹輔
大学院人間・環境学研究科教授	西山 良平

2月22日（水）

なぜ＜男子＞教育は論じられないのか
動物における男（おす）と女（めす） ―下等動物を例に

大学院人間・環境学研究科教授	小山 静子
大学院人間・環境学研究科教授	松井 正文

明治の恋、大正の恋 ―漱石とのその弟子たち

大学院人間・環境学研究科助教授	須田 千里
-----------------	-------

司 会 大学院人間・環境学研究科教授 西脇 常記
フルート演奏 アンサンブル カラビンカ

4. 受講資格：問いません。
5. 受講料：6,200円（消費税を含みます）
6. 申込方法：郵便ハガキ、ファックス、Eメールの何れかにより、郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号をお知らせください。
7. 申込先：〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町 京都大学大学院人間・環境学研究科総務企画室 宛
TEL：075-753-6599 FAX：075-753-7908 E-mail：110kikaku@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
〈申込締切日〉 平成18年2月10日（金）
詳細は人間・環境学研究科ホームページをご覧ください。
<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/jinkan/information/kokai.html>

お知らせ

総合博物館

— 修復記念特別公開 — 『マリア十五玄義図』 展

「マリア十五玄義図」（正式名称「紙本著色聖母子十五玄義・聖体秘跡図」）は、昭和の初めに茨木市で発見された絵画です。周囲の十五の絵は、マリアとイエスの生涯を描き、下段にはザビエルなど四聖人が配置されています。この絵画は、製作当時の状態をほぼそのまま残した良質のキリシタン遺物であり、平成13（2001）年には重要文化財に指定されました。経年による痛みのため、長らく公開をひかえてきましたが、平成16年度に念願の修復を行うことができました。今回は、修復完了を記念して、そのお披露目展示を行うものです。

1. 会 期：2月1日（水）～2月26日（日）
2. 会 場：京都大学総合博物館
3. 開催時間：9：30～16：30（入館は16：00まで）
4. 休 館 日：月曜日・火曜日
5. 入 館 料：一般400円 大・高校生300円 中・小学生200円〔20名以上団体割引有〕

関連事業 マリア十五玄義図修復記念特別講演会

1. 日 時：2月11日（土）13：30～17：00
2. 会 場：京都大学百周年時計台記念館
3. 講 師：慶應義塾大学 教授 林 温
「日本絵画史から見た『聖母子十五玄義図』」
岡墨光堂 取締役社長 岡岩 太郎
「『聖母子十五玄義図』の修復」
4. 参 加 費：無料

問い合わせ先・申し込み先：京都大学総合博物館

〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL：075-753-3272 FAX：075-753-3277
HP：<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/indexj.html>



遺伝カウンセラー・コーディネータユニット合同イントロダクトリーセミナー

1. 日 時：2月3日（金）13：00～17：00， 4日（土）9：00～17：00， 5日（日）9：00～11：50

2. 会 場：芝蘭会館山内ホール（京都大学医学部構内北側）

3. プログラム：2月3日（金） 13：00～17：00

開会挨拶	大学院医学研究科長 教授 成宮 周
ご挨拶	文部科学省科学技術振興費室 山下 博之
ご挨拶とコースの紹介	ユニットコースディレクタ・専攻長 教授 小杉 眞司
近畿大学コースの紹介	近畿大学コースディレクタ 教授 藤川 和夫
お茶の水女子大の特設コースについて	お茶の水女子大 教授 千代 豪昭
CRCの活動状況と問題点	静岡がんセンター 齋藤 裕子
養成コースに期待すること	大分大学医学部 教授 中野 重行
評価委員会のご挨拶	

2月4日（土） 9：00～17：00

遺伝カウンセリングとは何か	ユニット 科学技術振興教授 富和 清隆
遺伝情報資源	医療倫理学分野 助教授 沼部 博直
産婦人科医療と遺伝カウンセリングユニット	科学技術振興助教授 澤井 英明
医療コミュニケーションとカウンセリング	
	ユニット 研究員（科学技術振興）講師相当 浦尾 充子

2月5日（日） 9：00～11：50

臨床研究コーディネータの役割	ユニット 科学技術振興助教授 佐藤 恵子
ヒト遺伝学と遺伝カウンセラー	近畿大学大学院総合理工学研究科 客員教授 武部 啓

4. 参 加 費：無料（要登録）

5. 申し込み・問い合わせ先：京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻

FAX：075-753-4649 E-mail：matsui-j@pbh.med.kyoto-u.ac.jp

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.pbh.med.kyoto-u.ac.jp/gccrc/news/060203.html>

経済研究所シンポジウム

やさしい先端政策分析 ―京都から霞ヶ関への発信―

1. 日 時：2月18日（土） 13：00～18：00（開場12：30）

2. 場 所：時計台記念館百周年記念ホール

3. プログラム：※プログラムは変更される可能性があります

基調講演 グローバリゼーションの意味を問い直す	経済研究所 所長 佐和 隆光
地球温暖化問題から見た今後の社会経済 ～京都議定書の発効を踏まえて～	
	経済研究所 先端政策分析研究センター教授 一方井誠治
TAMA（首都圏西部）と京都 ～二大イノベーション拠点の形成を目指して～	
	経済研究所 先端政策分析研究センター教授 児玉 俊洋
企業防災の推進と関西の役割	経済研究所 先端政策分析研究センター教授 丸谷 浩明
財政を巡る諸問題について	経済研究所 先端政策分析研究センター助教授 北浦 修敏
安全追求へ ～自殺行動の要因を探る～	経済研究所 先端政策分析研究センター助教授 渡部 良一
政策とコミットメント ～ゲーム理論的な考え方～	
	経済研究所 先端政策分析研究センター長 梶井 厚志

4. 参 加 費：無料

5. 主 催：京都大学経済研究所 共催 (財) 総合経済研究所

6. お申し込み／お問い合わせ先：

「京都大学経済研究所シンポジウム参加」と明記のうえ、代表者の方のお名前、ご連絡先（住所・電話番号・E-Mailアドレス）、参加人数を記入し、2月10日（金）までに、下記の宛先へE-Mail、もしくはFAX、往復はがきで、お申し込みください。また往復はがきによる申し込みについては、返信はがきに、必ず代表者の方のご住所を記入してください。参加は無料です。先着順に受け付けをし、定員（500名）に達した時点で締め切らせていただきます。

〒606-8501京都市左京区吉田本町 京都大学 経済研究所 先端政策分析研究センター

TEL：075-753-7194 FAX：075-753-7178 E-Mail：caps_sympo@kier.kyoto-u.ac.jp

詳細はホームページをご覧ください。http://www.kier.kyoto-u.ac.jp/caps/symposium/

平成17年度防災研究所研究発表講演会

1. 日 時：2月21日（火）9：30開会 2月22日（水）9：00開会

2. 会 場：京都テルサ（京都市南区東九条下殿田町70番地） J R 京都駅から南へ徒歩10分

3. 参 加 費：無料

4. プログラム：

2月21日（火） 9：30 開会の辞

防災研究所長 河田 恵昭

特別講演 9：40～13：50

9：40 「耐震工学に果たす大型構造実験の役割－その可能性と限界」

防災研究所教授 中島 正愛

10：30 「地震予知研究の今昔－経験から科学へ」 日本地震学会会長 大竹 政和

11：20 「Fundamental Hydrological Modeling Related to Natural Disasters」

ワシントン大学教授 Stephen J. Burges

13：00 「ハリケーン「カトリーナ」による広域災害に対する社会対応」

防災研究所教授 林 春男

災害調査報告 13：50～14：50

13：50 「2005年台風14号による九州の土砂災害」

防災研究所教授 千木良雅弘

14：25 「2005年福岡県西方沖地震について」

防災研究所助教授 飯尾 能久

防災研究所助教授 田村 修次

一般講演 15：00～18：15

2月22日（水）

一般講演 9：00～12：00・14：00～17：30 ポスターセッション 9：00～17：00 発表 11：30～14：00

5. 問い合わせ先：京都大学宇治地区事務部研究協力課研究支援掛

E-mail：uji.sien@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp TEL：0774-38-3352 FAX：0774-38-3369

詳細はホームページをご覧ください。http://www.dpri.kyoto-u.ac.jp

編集後記

新年を迎えた時計台もうっすらと雪化粧。法人化3年目の京都大学は、それぞれ構成員が使命を再確認し、学問の伝統を守り、必要な改革を進め、社会貢献の役割を果たし、揺るがなく歩みたい。